

幼小中連携による体づくり運動の系統的指導

三輪佳見¹⁾・野邊麻衣子²⁾・高橋武大²⁾・高橋祥朗³⁾・西田英司³⁾
馴松郁美³⁾・永江彩乃⁴⁾・中園雅貴⁴⁾・森崎由理江⁵⁾・日高正博⁵⁾

Methodische Übungsreihen zur Entwicklung koordinativer Fähigkeiten in der Schule

Yoshimi MIWA, Maiko NOBE, Takehiro TAKAHASHI, Yoshirou TAKAHASHI,
Eiji NISHIDA, Ikumi NAREMATSU, Ayano NAGAE, Masaki NAKAZONO,
Yurie MORIZAKI, Masahiro HIDAKA

I. 問題の所在

子どもの体力低下や運動時間の減少などの危機を背景に、平成20年告示の学習指導要領において「体づくり運動」が小学校低学年から導入された(4-4頁)。しかし、「体づくり運動」の授業を導入したからといって、直ちに体力・運動能力のテスト結果が改善されるわけではない。このような誤解を招かないように、平成29年の改訂では、小学校高学年から取り上げられる「体力を高める運動」という名称が「体の動きを高める運動」に変更された(5-26頁)。体の動きを高め、体を動かす喜びを知り、運動を実生活に取り込む児童生徒を増やし、結果的に体力が高まり、体力・運動能力テストの得点も向上させたいと考えられている。

ところで、このような重要な役割を担っている「体づくり運動」の授業の実態はいかなるものであろうか。同じ体力要素を育てるために、小学校と中学校で同じ動きを行っている現状も見られる。また「何をどう指導すればいいのかわからない」といった悩みを抱えている教員も少なくない。体力向上につながるように「体の動きを高める」ためには、運動する条件を児童生徒の実態に合わせて変えていかなければならない。

そもそも人間が運動するというのは、周囲の世界と関わる行為である。たとえば、字を書くという日常生活の行為において、はじめは鉛筆を5本の指で握りしめ、字として認識できないようなものしか書けない。しかし、鉛筆との関わりを変え、3本の指で持てるようになり、さらに筆圧も調節しながらきれいな字が書けるようになっていく。

また、スポーツへと発展していくボールを投げる遊びでも、単に勢いよく手から放り出すだけだったのが、的当てのように目標に向けて行うためには、異なる投げ方が求められるというように、運動の意味、つまり、相手や対象物との関わり方によって、多様な動きがつけられて

1) 宮崎大学大学院教育学研究科

2) 宮崎大学教育学部附属小学校

3) 宮崎大学教育学部附属中学校

4) 宮崎大学教育学部附属幼稚園

5) 宮崎大学教育学部

いく。しかし、投げるためにはボールをつかめなければならない。バスケットボールのようなゲームでは、捕れなければパスしてもらえず、投げる機会は与えられないのである。学校体育において多くの子どもたちがボール運動（球技）を好むが、捕れない子どもはゲームそのものには参加できない。そうかといって、ボール運動（球技）の時間だけで捕る技能を獲得することは難しい。そこで「体づくり運動」の領域における「巧みな動きを高める」学習に捕ることを結びつけることが効果的であるといえる。このことはカリキュラムマネジメントの観点からも有意義である。

こうした現代の運動指導における問題を踏まえて、本研究は幼稚園・小学校・中学校が連携して、発達段階に応じて動くボールという対象物との関わり方をどのように系統的に指導していくべきか検討し、小学校低学年と高学年の「体づくり運動」の授業改善に実践的に取り組んでいく。

II. 周囲の状況に応じて動ける身体能力

競技スポーツの世界では、バレーボールのいわゆる「パンケーキレシーブ」やイチロー選手の背面キャッチのように、動いているボールに対して驚異的な身体能力が示される。ただし、ここで取り上げられる身体能力の意味は、生理学的な〈体力〉ではなく、コツやカンといった「フッサーの言う〈キネステゼ能力〉、つまり動感身体に潜む〈能力可能性〉が意味されている」（3-29頁）。コツは「身体をどのように動かせばうまくいくのかという〈私の動きかた〉に身体中心化として収斂していく」（1-326頁）身体能力であり、カンは「私の身体を取り巻く状況の有意義さをとらえ、同時にその動感志向を投射できる〈私の動きかた〉を生み出す」（1-326頁）身体能力である。

それでは、飛んでくるボールを捕るときに働くコツとカンを考えてみよう。ボールを捕る身体の動かし方も、まず片手あるいは両手で行うのかどうかで異なる。片手の場合、手のひらを上下、前のどの方向に向けるか、また同じ前に向けていても指先は上下、あるいは横のどの方向に向けているのかなどメタモルフォーゼしていく。

また両手の場合は、ボールを抱え込むように両腕と胸を使って捕ったり、両手だけで挟みつけるようにする捕り方がある。さらに腕だけでなく、全身の使い方から多様な捕る動きになっていく。たとえば、高いボールをジャンプして捕る、低い位置で捕るためにしゃがみ込む、落下点に走って移動して捕る、あるいは走りながら捕る、スライディングしながら捕るなどの広がりをもっている。これらの身体の動かし方ができるかどうかは捕るコツの問題である。

一方でカンは、ボールがいつ、どこに、どのような速さで飛んでくるかという動きを読み、そのボールを捕るためにはどのような捕り方がよいか選択する働きである。言い換えると、カンが働いて動けるためには、それに見合うコツを持ち合わせていなければならない。たとえば、ボールがこう飛んでくるという動きを読めたとしても、その落下点への動き、捕るための動きのコツがなければ、ボールを見過ごすだけになってしまう。反対に、身体を動かすコツがあっても、ボールの動きを読むカンが働かなければ、的外れの動きになって捕球することはできない。このようにコツをもっているカンが働かなければ動けない、状況が読めてもコツを持ち合わせていなければ動けない。つまり、動けるといえることは、コツとカンという動感力が表裏一体となって働かなければならないのである（2-307頁）。

しかし「コツとカン」は〈相互隠蔽原理〉に支配されていて、一方のコツが働くときには、カンは背景に身を隠して息づいており、カンが顕在的に表に現れるときにはコツは隠れて働くという〈同時反転性〉(3-51頁)をもっており、コツとカンを同時に意識することはできない。したがって、飛んでくるボールの動きに自己の動きを合わせられるように指導するためには、学習者が持ち合わせているコツとカンを同時に働かせられるボールの動きを考慮して、系統的・段階的に課題を設定することが肝要である。

Ⅲ. 系統的なカリキュラムづくりを目指す体づくり運動の指導事例

1. 幼児の実態に基づいた小学校低学年における指導事例

(1) 年長児の実態

1) 平面を転がるボールに対する幼児の動き
 小学校低学年における指導の起点を考えるうえで、幼稚園年長児の動いているボールに対する動きの実態を把握しておく必要がある。これまでの考察から、飛球(フライボール)はもちろん、大きくバウンドするボールを捕球するのは難しいと考えられる。そこで、動きを読みやすい平面を転がるボールで、しかも足で止める課題をさせてみた。



写真1：幼児がボールを足で止める場の設定

写真1のように、高さ1.5mの台に、長さ1.9mの雨樋3本をつなげて立てかけ、直径15cmのゴムボールを転がした。はじめに、正面に幼児を立たせ、まっすぐ転がってくるボールを足で止めさせた。足で止めるということを理解させたうえで、次に転がっているボールに向かって走っていき、足で止める課題を設定した。図1の①～③の3か所から幼児をスタートさせた。ボールが転がり始める場所からの距離は①が10m、②が9m、③が8mである。

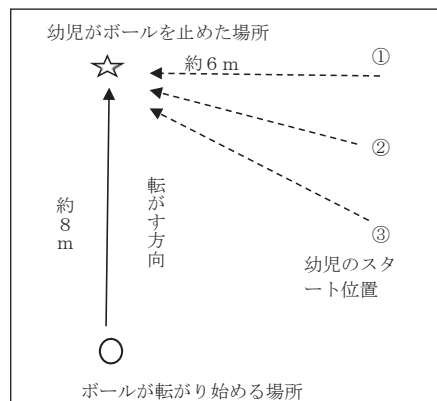


図1：幼児のスタート位置

②と③からスタートしたときは、どの幼児もほぼ同じ方向に走りボールを止めた。また①のときは、技能の高い幼児は手前で止めることができた。いずれにせよ、転がってくるボールの方向を読んで移動し、ボールを止めることはどの幼児にも可能であった。

2) バウンドするボールに対する幼児の動き
 平面的ではなく、上下する動きが加わるバウンドボールが捕れるかどうか試してみた。はじめは教師と幼児が向かい合って立ち、教師が投げた



写真2：ボールに向かって動く幼児

ボールが数回バウンドした後に、幼児は胸や腰のあたりでボールを捕った。そこで、図1と同じようにバウンドするボールに向かって走って移動し捕ることをさせた(写真2)。ボールが飛んでいく方向を読んで、ボールと出会える場所に移動することはできるが、バウンドの高さや上下する動きに自己の身体の動きを合わせられず、捕ることができない幼児がいた。さらに、ボールを見逃してしまう幼児や、ボールがバウンドしてくる場所を通り越してしまう幼児もいた。

(2) 小学校低学年における指導計画

第2学年児童(男子18名、女子17名、計35名)は、半年前(2018年6月)の「体づくりの運動遊び(多様な動きをつくる運動遊び)」で、対面から仲間が転がすボールの正面に移動して左右開脚立ちになり、脚の間を通すボールゲームを行った。はじめは、転がるボールに追いつけない等、ボールの動きに合わせて移動できない児童がいた。幼児でも対応可能な転がってくるボールに追いつけない小学生がいたのは、上述の幼児が実施した場ではボールの転がる方向が一定であったのに対して、小学校低学年のゲームでは相手が多様な方向にボールを転がしたためであると考えられる。

そこで、ボールの動きに合わせて移動できる児童と、思うように移動できない児童を含めた3人組を編成して、繰り返しゲームを行わせた。3人組で活動する過程で、仲間を観て動き方を理解したり、「右、右!」等とアドバイスしたりする姿が見られ、授業の終わりには全員ができるようになった。

平面を転がるボールの正面に入ることはできるようになったが、普段の遊びで行うドッジボール等を見ると、飛球を捕る児童が多いとはいえない。本研究で行う「ボール投げゲーム」では、平面を転がるボールだけでなく、飛球の動きに合わせて身体を移動させて捕る技能が守備側に求められる。そこで、ボールの動きに合わせて身体を移動させるという巧みな動きを高める「体づくりの運動遊び」と、「ボール投げゲーム」を複合した単元を計画した。そのうち、ボールを捕る運動遊びを3時間の授業の前半部で取り上げた。

(3) 実践結果と考察

打って攻める2対2のボールゲームを行わせることによって、「飛んでくるボールをキャッチしたい」と守りに意欲・関心が向くようにした。そのうえで、幅1m×長さ2.5mの網を用いて写真3のように斜面をつくり、上から転がり落ちてくるボールを捕ることに繰り返し挑戦できるようにした。

ボールをうまく捕れる児童は、ボールの落下点に移動し、ボールの動きに自分の身体を瞬時に合わせ、両手で抱きかかえるようにして確実に捕球していた。たとえば写真4の女児は、落下点に入れたときは膝を曲げて腰



写真3：ボールを捕る練習の場



写真4：ボールを捕れる児童の動き

を落としながら捕り、少しずれてしまったときは足を1歩出して捕球した。

一方、写真5の児童Aは、ボールに近づき過ぎて後ろにそらしてしまった。ボールが落下する方向に動くことはできたが、ボールとの遠近感をつかめずにいた。次のボールは後逸こそしなかったが、やはり近づき過ぎてしまい、顔でボールを捕ることになってしまった。

そこで児童Aに、しゃがみ立ち姿勢で捕球する児童の写真6を見せ、「落下するボールを下で待つ」イメージをもたせた。すると児童Aは、同じように低い姿勢でボールが落ちてくるのを待つようになった。また、この姿勢で構えるために、ボールを投げたらすぐに移動するようになった。ボールをうまく捕れるようにはならなかったが、「すごい近くに行きすぎてた」と日記に記し、自身の遠近感の問題を自覚していた。

また児童Bであるが、顔を背けてしまうので、落下点に移動しきれなかったり、ボールに手が届いても弾いてしまったりして、なかなか捕れなかった(写真7)。練習を重ねるうちに捕れることもあったが、捕球の瞬間は目を閉じて顔を背け、上体が反っていた。

そこで児童Bに、「下からすくって抱っこする」という言語指示を与えた。捕れる回数は増えたが、相変わらず顔は背けたままであった(写真8)。ゲームのなかでも、飛んでくるボールに近づき過ぎて、ボールを顔に手で押し付けるような捕り方になってしまった(写真9)。捕球できたので児童Bは喜んでしたが、顔を背け、上体を反らす姿勢に、この時点で変容は見られなかった。

この授業の次の時間では、ボールを投げ

る位置を少し後ろに下げ、ボールの落下点までの距離を広げて「ボールキャッチ」を行った。落下点までの距離が広がると、写真10の児童Cのように落下点に入ることができず、ボールを落としてしまう児童が多く見られた。ボールを投げた後にボールの動きを見たまま動かず、ボールがネットから落ちるところになって慌てて走り出していた。



写真5：ボールを後逸する児童A



写真6：しゃがみ立ちで捕球する児童



写真7：顔を背ける児童B



写真8：抱きかかえるように捕る児童B



写真9：顔のところで捕球する児童B



写真10：落下点に入れない児童C

そこで、投げた後すぐに落下点へ移動することを指導し、周りの児童に「はいっ！」と声をかけさせた。この指示によって、落下点に向かって早く走り出して捕れるようになった児童が増えた(写真11)。しかし、児童Cも含め、まだ落下点へうまく移動できない児童がいたので、ボールを小さなカラーボールに変えて実施してみた。ボールが小さくなると、早く動き出して落下点へ移動しなければ捕れないと感じられたようで、投げた後の動き出しが改善され、児童Cはボールをすくうようにして捕ることができた(写真12)。



写真11: 捕れるようになった児童



写真12: 捕球に成功した児童C

今回は、真っ直ぐに斜面を転がってくるボールに対して、身体をどう動かすかということが課題として設定された。このようなボールの動きであれば、小学校低学年においても、落下点へ移動する動きを身に付けることができるといえる。さらに、落下点を読んで移動する動きを発展させるためには、真っ直ぐだけでなく斜めに転がってくるボールを取り入れていくことが考えられる。

2. 中学生の実態に基づいた小学校高学年における指導事例

(1) 中学生の実態

小学校高学年の授業をどのように改善すべきか考えるために、はじめに中学生が抱えている動きの問題を理解しておきたい。球技における中学生の実態として、以下のようなことが挙げられる。ソフトボールにおいて飛球を捕球できない。バレーボールにおいては、頭より高いボールに対しても、オーバーハンドパスではなくアンダーハンドパスを使い、その結果ボールがつかまらない。または、オーバーハンドパスとアンダーハンドパスのどちらの打ち方で弾き返すべきか判断できない。バドミントンにおいては、オーバーヘッドストロークで空振りをするなどの実態がある。

これらの問題には身体の動かし方が分からない、コツを持ち合わせていないという要因もあるが、そもそも飛んでくるボールの動きを先読みするカンが働かないのではないかと考え、以下のような課題を行った。

図2のように4分割されたコート(a～d)それぞれにマーカーを置き、そのいずれかをめがけて反対側から教師がアンダーハンドサービスでボールを打つ。サーブのボールが飛んでくるコートの中央で、生徒は分割された4つのどこにボールが落ちるか判断した時点で指し示す。記録者は、コートサイドから落下点が的中したか、「ボールを打った瞬間」、「ネットを通過する前」、「ネットを通過した後」のい

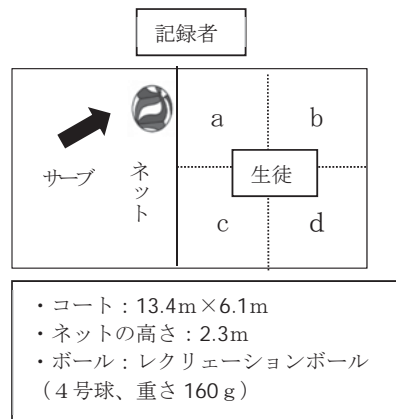


図2：中学生の実践の場

つ判断した（指示した）のかを記録する。

実施した結果は、74%の生徒が落下点を正しく判断できたが、約半数はボールがネットを通過してから判断していた。また、自分の前に飛球するボールの判断はできるが、自分の後ろに飛球したボールの判断が遅く、落下点を当てることも少なくなった。

次に、飛球の落下点に入る動きができるか試してみることにした。図2と同じコートで、サーブのボールが飛んでくるコートの中央にいる生徒にビート板を持たせ、頭上でボールを当てるとい



写真13：手前に飛んできたボール



写真14：頭上を越えていくボール

う課題をさせてみた。実施した結果、頭上または顔の前でボールを当てられた生徒は75%であった。しかし、立って構えていた位置より手前に落ちるボールには対応できる（写真13）が、頭上を越えるように飛んでくるボールの動きは読めずにビート板に当てられないことが多かった（写真14）。とりわけ、ボールをビート板に当てられなかった生徒には、ボールが放り出されると、それに触発される

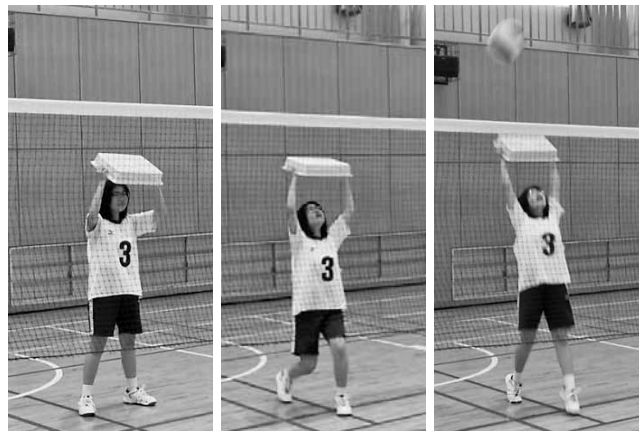


写真15：落下点を読み違える生徒

ように前に動こうと足を出すのが、ボールは頭上を越えていってしまうことが特徴的に見られた（写真15）。ボールが飛んでくる方向は予測できても、遠近感をつかめない生徒が多かった。

（2）小学校高学年における指導計画

第6学年児童32名（男子16名、女子16名）を対象に、体の動きを高める運動の単元に「巧みな動きを高める運動」として、飛球の動きを読み、ボールの落下点を読んで動けるようになるための学習活動を3時間設定した。

本学級では、半年前（2018年5月）にソフトバレーボール、3ヶ月前（同年9月）にバスケットボールの授業を実施している。身体の正面に飛んでくるボールは7～8割の児童が捕球できるが、少しボールが逸れると対応できる児童は6割程度に減る。また、中学生の実態からも明らかのように、高く投げ上げられたボールの落下点を読み、それに合わせて自己の身体を動かすことはできない児童が多い。

そこで、ボールの落下点に向かって動けるといふ捕るのに必要な基礎技能を形成するために、ボールをつかまなくてもよい用具で捕る動きを簡易化することによって、児童がなじみやすい課題を設定して指導を進めることにした。

(3) 実践結果と考察

1) 第1時

自分でボールを投げて捕る課題を投げ方や捕り方を変えながら実施した。投げ方はアンダーハンドスローやオーバーハンドスローで投げる、捕り方は捕球の位置を胸や腰に変える、さらにジャンプして捕るというように動きを変化させ、難易度を高めていった。

続いて、ペア活動で両手キャッチをさせ、互いの動きを観る機会を意図的に設定した。10回連続で捕ることを課題としたことで、より確実にボールを捕球しようとボールをよく観て構えたり、仲間同士で声を掛け合ったりする場面が見られた。

2) 第2時

はじめに、「ボールをキャッチする動きをしてみ」と声をかけ、その場で捕球の構えをさせた。その際、両手を身体の前に出す児童と胸で抱える動きをする児童があり、2種類の捕り方があることを全体で確認した。

次に、逆さまにしたコーンを両手で挟むように持たせ、飛んでくる飛球をコーンで捕るという課題を設定した。直径がコーンよりも大きなボールを身体の前で捕る課題を実施することで、ボールの落下点と自己の身体的位置関係に注意が向くようにさせた(写真16)。これに続いて、同じボールを使って3mの間隔でキャッチボールを行い、授業のはじめに確認した2種類の捕り方、つまりボールを両手と胸で抱え込むようにする捕り方(「がっちりキャッチ」と表す)と身体の少し前で両手で挟みつけるようにする捕り方(「前でキャッチ」と表す)をさせた。



写真16：コーンでボールキャッチ

さらに、「キャッチin長縄(長縄跳びをしながら、仲間からパスを捕球し、それを投げ返す動き)」という課題を行った。活動後に、「どっちのキャッチを使った？」と問うと、31名中30名が「前でキャッチ」と答えた。このことから、捕る後に行う運動を意識しながら捕り方を選択し、飛んでくるボールと自己の身体の適切な位置関係を形成していることが分かる。

3) 第3時

ボールの落下点に移動する動きの質を高めていくために、前時よりも遠くから、しかも高く投げ上げられたボールを捕るという課題を行うことにした。しかし、捕球技能には個人差が大きく、せっかく落下点に移動しボールに触れられたのにもかかわらず失敗したと感じ、学習意欲が萎えてしまうことが問題である。そこで、「ベッタンボード」という用具を用いて、捕球の動きを簡易化することにした。ベッタンボードは、ボールに吸盤がいくつも付いており、ボードの面にボールが当たると吸盤でくっつくようになっている。したがって、児童はボールの落下点に移動する動きに意識を集中させ、ボードをボールに合わせるだけで成功体験を味わえるのである。このようにして、技能差に関わらず、児童が意欲的に取り組めるように配慮した。さらに、技能差のある児童をペアリングし、教え合い活動の活性化を図った。

このベッタンボードを使って「ハイボールキャッチ」という課題を行った。落下点へ移動する動きをより多く引き出すためには、飛んでくる飛球が適度な高さをもって放物線を描き、落

下点がある程度前後左右に散らばる必要がある。そこで、260cmのミニバスケットボールのゴールの高さに張られたビニールテープをあいだにして二人が向かい合い、そのテープの上を越えるように一方の児童がボールを投げ、もう一方の児童がベッタンボードで捕るという課題を実施した。また、児童の投技能を考慮し、投げ方はオーバーハンドスローにさせた。

児童にとって捕りやすい仕方を実施し捕ることになったあとに（写真17）、ボールの落下点に自己の身体をどのように位置づけるかということ意識して動くように、捕球の位置を「顔から上」（写真18）、「腰から下」（写真19）、「地面すれすれ」（写真20）というように教師が指示をした。しかも捕球に失敗した場合、ベッ



写真17：捕りやすい仕方での捕球



写真18：顔から上で捕球



写真19：腰から下で捕球



写真20：地面すれすれで捕球

ッタンボードのボールに付いている吸盤が床に吸着するため、どこにボールが落下したのかを視覚的に確認することができる。

実施してみると、「顔から上」や「腰から下」では、高さは指示された条件に合っても、身体の前や横など、捕球場所は多様になった。それに対して「地面すれすれ」での捕球では、自己の身体の前で捕る児童が多かった。落下点に素早く移動し、ボールの落下点を正確に読むという動きの質の高まりを見ることができた。

さらに、ビニールテープをあいだにして立つペアの間隔を5～7mに広げ、ペアの捕球の仕方を交互に模倣させた。仲間の実施した難易度の高い捕球の仕方を模倣するためには、より落下点へ移動する動きの質の高さが必要になる。より素早く動く必要が出てきたり、より正確に落下点を予測したりしようと、飛球の動きを読もうとする姿があった（写真21）。



写真21：背面キャッチを試みる児童

以上のように多くの児童にボールの落下点に移動する動きの質の高まりが見られたが、落下点にうまく移動できない児童もいた。こうした児童の動きの特徴として、落下点よりも前に行きすぎてしまうことが挙げられる。ボールが飛んでくる方向は予測できても、遠近感をつかめないという中学生と同じ問題が見られた。

IV. 結語と展望

本研究は、動いているボールとの関わり方についての系統的な指導方法を、幼稚園、小学校、中学校の連携を図りながら検討するとともに、「体づくり運動」の授業改善に繋げていくことが目的であった。すなわち、ボールゲームを教材として扱う体育授業における子ども達の現状として、ゲームを楽しむための基底的な技能である「ボールを捕る」ことのできない子ども達の多いことが指摘され、その問題は、ボール運動（球技）領域だけでは解決には至らないことから「体づくり運動（巧みな動きを高める運動）」においても取り扱うことの必要性が確認された。

そこでまず、「ボールを捕る」運動に必要な「コツ」と「カン」が整理された。すなわち、飛んでくるボールに自己の動きを合わせるには、ボールの動きを読む「カン」を働かせ、落下点へ移動し捕るための動きの「コツ」が必要であることが整理された。そのうえで、指導に当たっては、学習者の持ち合わせている「コツ」と「カン」が働くようなボールを捕らせる必要があると考えられたことから、子ども達の実態や学年段階を踏まえて指導の工夫をしていくこととした。

以上のようなボールを捕ることについての問題点の整理や理論的な背景が確認されたことを受けて、本研究では、二つの調査とそれに基づく二つの授業実践を報告した。一つは、幼稚園年長児の実態調査を踏まえたうえで実践された小学校低学年児童を対象にした指導の具体で、もう一つは、中学生を対象にした調査により明らかにされた問題点の解決に繋がると考えられた小学校6年生児童を対象にした実践である。

年長児を対象にした調査では、床を転がる平面的な動きのボールには対応できるが、バウンドを含んだ立体的な動きになると難しい子どものいることが明らかにされた。また、小学校低学年で扱うボールゲームにおいても、飛球の動きに自身の身体を合わせてキャッチできない児童もいることが確認された。そこで、斜めに張られた網の斜面を転がり落ちてくるボールを捕る課題に挑戦させ、つまずき（落下点の目測の誤り、顔を背けるなど）のある児童に対して、個別に対処していくことで、落下点に移動する動きを身に付けることができた。

一方、高くふわりと上がったボールの落下点の予測の正確さと判断の速さが課題となった中学生対象の調査では、74%の生徒が落下点を正しく予測できたが、その判断のタイミングは遅かった。また、実際に動いて落下点に正しく入れるかを課した調査では、75%の生徒が正しく動けたと評価できたが、定位置より後方へのボールについては瞬間的な判断が遅れ、前に動いてしまう生徒の多かったことが特徴的であった。そこで、中学校段階における上記のような生徒を少しでも減らすために、小学校6年生児童を対象に3時間からなる体づくり運動の授業を実践した。その結果、キャッチする位置やボールの種類及び軌道を変えたり、落下点と身体的位置関係に意識が向くような工夫をしたりすることで、落下点へ移動する動きが質的に高まったことが確認された。

以上の事例的検討から、「ボールを捕る」運動についての実態を適切に捉え、系統的な指導を行えば、動きの改善が見られ、体づくり運動の授業改善に繋がることが明らかになった。しかし、今回は、幼稚園と低学年、高学年と中学生のみの繋がりであったため、低学年と高学年を繋ぐための系統的な指導については抜けたままである。また、ボールを捕る際の遠近感の未熟さについては共通して認められたつまずきである。さらに、今回対象とした児童生徒に対して

次の学年でどのような授業を実践すればよいのかという積み上げ効果についても検討すべき点である。これらは次年度以降の課題としたい。

文献

- 1) 金子明友：身体知の形成（上）、明和出版、2005
- 2) 金子明友：身体知の構造、明和出版、2007
- 3) 金子明友：運動感覚の深層、明和出版、2015
- 4) 文部科学省：小学校学習指導要領解説体育編、東洋館出版社、2008
- 5) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編、東洋館出版社、2018